

みんなづくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

プラットフォームとしてデータベースの活用：
台湾でのワークショップの経験から：基幹研究：
台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野林, 厚志 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009167

基幹研究 ● 台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応

情報生成の考え方

本プロジェクトの醍醐味の一つは、情報生成型のデータベースが構築できるかということと考えている。ここで示すところの情報生成にはいくつかの側面がある。まだ先の話になるだろうが、筆者が期待しているのはデータベースやその他の情報のプールから深層学習等によって、コンピュータが新たな情報を生成してくれることである。

コンピュータが提供するデータとは、あくまで既存のデータから引き出されたものであることに留意しておく必要がある。とはいえ、こうした手法を用いて、他のデータベースと情報のつながりを見つけ出すことは可能であるし、そこから、研究上の有益な示唆を利用者が得ることはじゅうぶんに期待される。たとえば、台湾のビーズ製品とフィリピンやボルネオのビーズ製品との形態、素材、機能の相関性を検出するためのプログラムがあれば、オーストロネシア系諸集団の文化的、歴史的な連続性をビーズ製品に着目して考察するためのモデルの構築が期待される。

インターネット上に存在する同様な情報をとりこむことによって、情報を生成するための資源の範囲は膨大に広がる。単なる横断検索にとどまらない深層学習によるビッグデータの解析は、個別の情報の解釈にとどまらない高次の情報を与える潜在力をもつ。人類学が、人間とはなにか、人間文化とはなにか、という問いかけをいまだ捨てていないのであれば、これまでに集積してきた膨大なデータを使った新たな研究の視座をもたなければいけない。

一方で、新たな情報や知識、知見を得ることは学術研究という点において極めて重要なことであるし、研究者の欲求でもある。博物館の資料についても、それらに精通している人、資料の情報を集める術をもっている人、資料に関心をもってそれを活用している人との協働は、新たな情報や知見を生み出すための有効、かつ魅力的な方法である。

こうした協働のためのプラットフォームとして、このデータベースをいかに活用していくかを考えるためのワークショップを、2016年度、2017年度に開催した。

2つの現地ワークショップ

2016年度は、2016年11月26日に「台湾資訊跨國多語言交流平台(台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム)」をパイワン族・ルカイ族の居住者が多い台湾南部の屏東県にある原住民文化園区で開催した。

ワークショップは、台湾原住民族の文化や歴史を研究、展示する中心的な機関である原住民文化園区と国立台湾史前文化博物館の共催を得るとともにこれらの2機関以外にも地域の資料館や博物館の資料担当職員、地元に住んでいる原住民族の工芸作家や刺青の彫り師にも参加してもらい、データベースを閲覧しながら意見交換を行なった。

実際にデータベースをソースコミュニティの人たち、とりわ

け、工芸制作や文化事業にたずさわっている人たちといっしょに使ってみると、こちらが想定していなかった状況が生まれた。衣服については饒舌な人が、土器や籠には関心を示さなかったり、資料に関する議論が、データベースの画面上と会議場との間で交錯する状況が生じたりしたことである。

たとえば、下の図は、あるパイワン族の衣服に関する意見の交換である。参加者の一人がデータベースの書き込み欄に、この資料に付されている4人の人物の紋様を「王族」に特有であると表現したことについて、他の参加者から「王族」という表現は適切でなく、パイワン族の社会制度についての不理解を示すものであるという指摘や、このデータベースは国際的に発信されているので、内容の真偽性には注意するべきだという書き込みがあった。その後、画面の議論がワークショップの席上に移された。換言すれば、文字から声へ議論の手段が変わったのであった。データベースの画面を見ていると、「炎上」に見えなくてもないやりとりが、実際の議論と並行することによって、現実の顔が見える討論という安心感が生まれた。また、資料そのものについての正誤を問うだけではなく、パイワン族の社会組織に関する議論に展開したことは、民博資料を手がかりに、その背景にある民族文化への議論につなげていく手応えを与えてくれた。

2017年度は、タイヤル族の居住者が多い中北部で「文物資料

本件之四人頭圖紋，為內文社群兩大王族之一白峻王族之傳家圖騰，象徵該王族四個兄弟姐妹遷移之傳說故事。該王族目前後裔在臺灣屏東縣獅子鄉。

User 21
2016/11/26 16:01

建議不要使用王族稱之。這樣會更讓人覺得貴館對於排灣族文化制度的不了解。

User 11
2016/11/26 16:43

目前存有【頭目】跟【王族】兩種名稱。

User 04
2016/11/26 17:18

雷斌：父親詳細研究排灣族的制度-邦聯型態，非王朝型式。所以建議謹慎使用。這個網址屬國際性，更需注意。

User 04
2016/11/26 17:19

當時日本在訪視部落時，其實頭目不想被訪談。所以有訪談到的是第二貴族

User 02
2016/11/26 17:24

パイワン族(H0019212)の衣服に関する意見の交換。

庫工作坊(標本資料データベースワークショップ)」を2018年2月に開催した。2014年の民博の展示場のリニューアルの際に展示資料の提供を受けたタイヤル族の染織工房である野桐工房が中心となり、現地での準備を進めてくれた。

会場は、2016年に台湾で最初に認定された原住民族の民族実験学校である台中県のPuma(博屋瑪)国民小学校であった。台湾の一般小学校の課程をふまえて、タイヤル語や野外活動を重視し、タイヤル文化の教育をとりこんだ公立の小学校である。比令・亞布校長をはじめ同小学校の教員もワークショップに積極的に関わってくれることになった。インターネット環境も整備されており、博物館や大学、研究所といった高等教育機関以外でもデータベースを活用したワークショップの実施が可能なることを示すことができた。

ただし、予期せぬ出来事がこの時に生じた。代表者である筆者が、台湾への出発当日の朝にインフルエンザに罹患していることがわかり、きゅうきょ出張をとりやめ、共同研究員である寺村裕史(国立民族学博物館)が現地へ赴きワークショップを実施することになったのである。一方で、このことはプラットフォームとしての機能の別の側面を考えさせることにつながった。

ワークショップは、寺村が民博で進めているプロジェクトや研究の紹介をしたのちに、いくつかのグループに分かれてデータベースを利用しながら、データベースの使用感や操作性、資料に関する意見交換を進めた。筆者は、病床でコンピュータを抱えながら、インターネット通話とデータベースを閲覧しながらでの参加を試みた。

しばらくすると、資料のコメント欄に感想や質問が書き込まれていったので、筆者もそれらへの応答を試みた。たとえば、平埔族であるパゼツへ族の袖なし上着(H0176295)については、



パイワン族の女性用の衣服(標本番号H0019212)。

①資料収集の方法も含めて、当時の詳しい資料があればよい(現地側)。②似た資料が台湾大学の人類学博物館にある。その収集地域から考えると、民博の資料の民族名の記載には疑問の余地がある(現地側)。③収集者の記録から民族を判断した。ただし、収集者の専門性は考慮する必要がある(筆者)。④民博の資料は記載のものとは異なる。現在、台湾ではソースコミュニティが民族衣装の再製を行なっていて、なにがそのもとになるのかは課題である(現地側)。こうしたやりとりが、台湾と日本との間で同時進行することになった。

データベースの活性化にむけて

ワークショップを通じて、データベース設計の当初段階でコメント機能を組み込んだのは正解であったことをあらためて感じた。ただし、データベースを閲覧した人が自主的に書き込んでくれるという期待があったものの、ワークショップ終了後は、書き込みがほぼ見られないのが現実である。このことは、情報を生成するためには、人を積極的に動かすための仕掛けが必要だということを如実に物語っている。ぎゃくに、ワークショップや聞き取り調査を行うためのプラットフォームとして、今回構築したデータベースが有効であることも、数少ない事例ではあるが実践的に示されたとも言える。

また、ソースコミュニティの人たちにとって、ワークショップへの参加は、民博での熟覧調査を本格的に計画する契機になったようである。2018年2月のPuma(博屋瑪)国民小学校でのワークショップ参加者を含め30人程度の原住民族が同年7月に熟覧調査を実施することになった。嬉しいのは、調査する資料を選定するために、日本語、中国語、英語で制作され、民族別での検索や画像による資料の閲覧が容易なデータベースが有効に活用されていることである。熟覧資料の決定の連絡は、日本語のみの目録情報データベースを公開していたころよりもはるかに早く届けられた。これは民博側が受け入れの準備をするうえで効率的で好都合となる。

本プロジェクトで構築したデータベースが果たしている役割の1つは、ソースコミュニティと博物館との心的距離を縮めたことかもしれない。それは、同時に博物館への期待や失望があらわになることも意味しているのではあるが。

のばやし あつし

国立民族学博物館学術資源研究開発センター教授。人類学、民族考古学を専攻。主な調査地は台湾。著書に『台湾インノシシを追う』(臨川書店2014年)など。

這件服飾依據圖紋判斷,應該不屬於Pazeh族群,若依據國立台灣大學的藏品分類應該屬於和安雅族的物件。然而,目前苗栗Taokats族群以此服飾重製道卡斯服飾,然而為何採用本件服飾,其族群認知及依據何種原因不明?

User 14
2018/02/12 15:24

這個服飾是瀨川孝吉先生蒐集的。他原來是農林技師。他的記錄是Pazeh。他不一定注意詳細的族群關係的事。

野林 厚志
2018/02/12 15:36

此物品與H0176295應該為同一族群的物件!
如果依據台灣大學人類學博物館所典藏相似的物件的確是在埔里地區會採集到的物件。
但若比對在埔里噶哈巫族(曾被分類為巴宰族的支族)的確有很大的圖文上的差異!
至於技法上能否判斷,可能得看實物物件才能得知。

User 14
2018/02/15 13:04

比較好奇的部分是,日本民博這些藏品的來源,購買?移交?是否有更早期的紀錄,可以一併提供,或許可以找到一些蛛絲馬跡。
如能提供更多原始採集資料,或許會更有助益。

User 14
2018/02/15 13:06

パゼツへ族の衣服(H0176295)について交わされたコメント。